

## ■ 目下はドル独り勝ち！？の構図

昨日（7/18）、ついにドル/円が一時的にも113円台に乗せる展開となった。

米中の貿易摩擦が“貿易戦争”に発展してきているのにも拘らず、いわゆる「リスクオフの円高」の傾向が強まってこないため、これまで円買い持ちを進めていた向きが慌ててポジションを解消し続けている側面もあると見られる。

また、前回更新分の本欄でも述べたように、米中貿易戦争が世界経済全体に暗い影を投げかけるとするなら「消去法で最も強いのはドル」ということにもなる。ことに新興国は最も強いダメージを受けると考えられ、足下では新興国に還流していた投資マネーが次々に米国へ向かい始めるといった動きも見られている。

新興国債券に投資されていたマネーは米国債に向かい、結果、米債利回りの上昇が押さえ込まれていることから、NYダウ平均やナスダック総合指数など、各種の米株価指標もすこぶる堅調な推移を続けている。奇しくも、米国が仕掛けた貿易戦争の様相が色濃くなればなるほど、リスクを嫌気したマネーが米国債や米国株に向かうという皮肉な構図になっているのだ。

テクニカルな面からも、今はドル買いが進みやすい状況と言える。

本欄の7/5更新分で述べたように、ドル/円の月足は6月に月足・終値で31カ月線を上抜けたうえ、7月に入ってから一目均衡表の月足「雲」上限をも上抜けるという驚きの展開となっている。このまま、7月の月足・終値が月足「雲」を上抜ける格好となれば、そのインパクトはかなりのものであると言っていいだろう。

また、前回（7/12）更新分の本欄で述べたように、2015年6月から形成してきた三角保ち合い（トライアングル）を上放れたと同時に、週足「雲」上限をも上抜け、さらに週足の「遅行線」は26週前の週足ロウソクが位置していた水準もクリアに上抜けてきている。

目先は、年初来高値の113.40円処が意識されやすくなるものと思われるが、同水準をクリアに上抜けてくれば、次に114円台半ばから115円にかけてのゾーンが試されることとなってもおかしくはないだろう。

また、対ユーロや対ポンドでも足下のドルは強気を維持しており、基本的にドル堅調の展開は今しばらく続くものと見ておいていいものと思われる。ことにポンド/ドルは昨日（7/18）、一時的にも1.3010ドルまで下押し場面があり、昨年10月初旬以来の水準に値を沈める格好となっている。英中央銀行（BOE）による8月利上げが有力視されているなかでのポンド安は、それだけ英国が抱える欧州連合（EU）離脱の“闇”の深さを思い知らされるようでもある。

一方、ユーロ/ドルも足下では実に冴えない展開を続けており、当面は一目均衡表の日足「雲」下限が上値抵抗として強く意識される。週足でも「雲」の中に潜り込んだ状態が続いており、当面は週足「雲」のなかで一定のリバウンド余地を探ると見られるものの、少し長い目では週足「雲」下限の水準をいずれ下抜ける方向に向かうと個人的には見ている。

とどのつまり、新興国通貨や円、そしてユーロやポンドに対しても目下のドルは独り勝ちの状況となっており、なおもドル/円やクロス円の上値余地が一段と拡大することへの期待も衰えていない。ただ、4月半ばあたりから上昇を続けていた「ドル指数」が一つの節目水準に到達して、暫くは頭が押さえられやすくなると見られることに加え、7月下旬に日米貿易協議（FFR）の初会合が開かれるとされていることで、前もって警戒感が拡がりやすくなる可能性もあるといった点には留意が必要とも言える。

また、本日（7/19）発表予定のフィラデルフィア連銀製造業景況指数のように俗に「マインド系」と呼ばれる指標は貿易戦争の行方に対する警戒を反映した結果となる可能性が高く、そうした点も一応の注意は必要であると思われる。